

Title	接辞ラレの意味と機能
Sub Title	Meaning and grammatical function of Japanese Affix "Rare"
Author	大野, 純子(Ono, Junko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.61, (1992. 3) ,p.138(117)- 155(100)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00610001-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

接辞ラレの意味と機能

大 野 純 子

0. はじめに

日本語の動詞に -(r)areru (以下、ラレと記述する) を添加すると自発、受身、可能、尊敬の四つの用法が生じる。小稿はその四つの用法の有機的つながりを考慮しながら、ラレの意味を決定する要素は何かを探ることを目的とする。

決定要素は述語動詞の内部にあるもの、格関係など文内部にあるもの、前後の文脈、予備知識など文外部にあるものの三つに分けられる。以下に各用法についてこれらの決定要素がどのように適用されるのかをみる。また、用法がまぎらわしくなるのを避けるためにどのような代替表現が使われているかも観察した。

(使用した例文は一部の作例を除き、日本語の小説、エッセイからとったものである。)

1. ラレの用法と判断の基準

ラレは動詞につく生産的な接辞である。ラレには、①自発 ②受身 ③可能 ④尊敬の四つの用法がある。この四つの用法はもともと関連が深い。物事の自然な発生(自発)は、動作主が主格を退くことを示すので「受身」につながる。自然に発生するということはそうする能力を持っているということになり、「可能」につながる。尊敬の用法は一番後から出て来たものである。動作主を明示しないという間接的表現が敬語的発想につながっている¹⁾。

「あの先生は太郎に英語を教えられる」の下線部は受身、可能、尊敬の

(100)

三通りの解釈を許す。日本語のネイティブ・スピーカーはどのような判断基準をもって、この中から一つの用法を選択するのだろうか。

判断基準になるものを大別すると、問題となるラレを含む文の外部からの情報と、ラレを含む文内部の情報との二通りになる。

外部からの情報で中心になるのは前後の文脈である。

1 「たまたまその商品が賞味期間を過ぎておりまして苦情を寄せられました。」 (1)

(出典は「出典一覧」にまとめて記載。記載のないものは作例。)

1はある小説の一文である。下線部は受身とも尊敬とも考えられる。次の2はその前文である。(同一話者による。)

2 「前にあった苦情ですが、よその地域から来られたお客様が私共の商品を近くに住む方に“お土産”にしましてね。」

この場合、読み手は2の文から判断して、1の文の後半は「私共は苦情を寄せられました」ではなく、「そのお客様が苦情を寄せられました」であると考え、ラレは尊敬の用法の意味であるとする。前文が問題となる文の主語を決定しているのである。他に、聞き手の予備知識もラレを含む文外部の情報と言えらるだろう。

文内部の情報で重要なのは格表示である。1のように外部からの情報で格関係が示唆されることもあるが、文内部での格表示なら、それは確固たる決定条件になる。

3 このサインは他人にすぐまねられる。

3の下線部分のラレは「他人に」の二格があるので受身である。もしこの「に」が「が」であれば、可能のラレになり、「このサインは他人がすぐまねることができる」という解釈になる。3の文はこの「に」一つで、ラレの用法が決定されている。これは最も単純な例で、

3' このサインは他人にもすぐまねられる。 (受身、可能)

3'' このサインは他人はすぐまねられる。 (受身、可能)

のように、助詞の変換によって用法が変化する。助詞「は」は既に数々の論文に記されているように、ガ格の代用とし用いられている場合とその他

の場合があり、ラレの用法決定の際、正しい解釈がされていなければならない。

文の修飾語句もラレの用法決定に影響することがある。

4 君はよく見られるね。

4' 君はうまく見られるね。

4のラレは可能または受身の解釈ができる。しかし、「よく」を4'のように「うまく」に変えると、ラレは可能ととるのが一般的で、受身の解釈には無理が出てくる。

一般社会常識の情報も無視できない。たとえば、

5 名誉総裁が会場に来られた。

のラレは一般的には尊敬を表すととられるだろう。同様に、

6 小さい子供が会場に来られた。

の場合は可能のラレと考えられる。

しかし、以上のような諸基準を考慮しても、一つの用法を選択決定できない場合がある。以下に例をあげる。

7 ちょうど午後の休憩に入った時に行き合わせたので聞込みが効率よく進められた。 (2)

7のラレは可能か受身か、決定し難い。

8 「高沢君ごめんね。」衣子は遠ざかっていく 吾一のおもかげに詫びた。吾一の死の真相を突き止めたことが彼の記憶の風化をうながしている。つまり決着がつけられたのである。 (3)

8も同様に、前文の文脈の助けを借りてもラレが可能か受身か決められない。

2. 自 発

自発のラレは、自然にそうなるという意味を持つ。自発のラレは思考動詞とともに使われることが多いが、以下の例のように思考動詞以外の例も存在する。

9 その日の来るのが本当に待たれる。

10 子供が一人で待っているので足が自然と急がれた。

9の「待つ」、10の「急ぐ」は共に子音動詞である。子音動詞は受身形と自発形、尊敬形が同じになる。9、10の文は暗示されている主語に利害が及ぶか、及ばないかを問題にしていなので自発のラレと判断できる。

母音動詞の場合、受身、可能、自発、尊敬の四つが同形になってしまう。しかし、前述のように受身か、自発かを見分けるのはそれほど難しくない。問題は可能か、自発かの区別である。自発を可能の用法に含める考えもあるくらい、この二つの用法は接近または重複している。よってこの二つの区別は不可能なこともある。

11 朝の、人影もないロビーはなんとなく白茶けて、荒涼たる砂漠のように感じられる。(4)

11の下線部分は自発である。

12 タクシーをゲートから帰し、前庭^(ママ)を通して本屋玄関へたどり着くと、事務員風の若い女が立っていた。女は無表情に先に立って応接室へ案内した。建物の中も人気が感じられずシンと静まりかえっている。(5)

12のラレは可能の用法を感じさせる。

13 この香りの違いも感じられないなら、謂香師になろうなどと思わない方がよい。

13のラレは可能の用法である。11～13のラレを見ると、自発のラレか、可能のラレかを判断するのに、動作主が意図して動詞の表す行為をしている（またはしようとしている、するつもりがある）かがポイントになっている。

「思考動詞+ラレ」の場合、その動作主の意志がそこに働いているのかどうかをあいまいにすることによって客観的な表現が生まれる。14、15はその例である。

14 官民ともボーナスの出揃う十四日の日曜日には、デパートの人出は最高になると予想される。

15 素読で育った明治の人たちは、その廃ったあとで成人した人たちに比べて概して文章が劃然としているように思われる。(6)

自発のラレは例文9, 10のような使い方より, 14, 15のような客観的な立場をとるための使い方の方が多い。

来ル・スルは受見と自発が同形になるが, 判断に迷うことはそれほどない。16は自発のラレの典型的な形「X (人) ニハ Y (コト) ガ Vラレル」である。

16 しかし怜子には, 彼が自分の判断にかなりの自信を持っているとが直感された。(7)

意味的に受身になりにくい動詞にラレをつけると, 子音動詞と「来ル, スル」は自然と自発に落ち着く。たとえば,

17 たいていこの程度のことであろうと予測はしていたものの, やはりまた失望の谷間に落ちこむ思いがした。同時に自分の愚かさや稚さがむかむかするような気持ちで自覚された。(8)

「自覚する」は能動文で「X (人) ガ Y (コト) ヲ 自覚スル」の形になる。これを機械的に「Y (コト) ガ X (ヒト) ニ ヨッテ 自覚サレタ」のように受身文にすると, 不自然な日本語になる。「自覚する」は再帰的意味を表す「自」を含む動詞である。同様の動詞で「自重される」「自嘲される」「自負される」なども, 受身より自発の用法の方が圧倒的に多い。²⁾

ラレの本義が自発にあったという説があるにもかかわらず, 現代日本語の口語レベルでは自発のラレがだんだん用いられなくなる傾向がある。自発ラレにとって代わるものとして～テシマウがある。

18 わたしは田中君がなんとなく意識される。

18は少しきたい表現ではないだろうか。口語では

19 わたしは田中君をなんとなく意識してしまう。

の方が一般的だろう。～テシマウにはいくつかの用法があり, 「自分の意志をこえて何かが起こる」ことを表している場合が自発と意味的に重なる。例文10は以下のように変えることが可能である。

10' 子供が一人で待っているので足が自然と急いでしまう。

以下にも, 自発のラレと～テシマウの互換性をみる例文をあげる。

20 あの山を見るといつも故郷の岩手富士

a が 思い出される。

b を 思い出してしまう。

20のaとbはほぼ同義である。

21 息子は先週から東京で一人暮らしを始めました。思うまいとしても
食事はどうしているのかしら、洗濯は——と

a 気遣われます。

b 気遣ってしまいます。

21のaとbも互換性を有するが、「気遣う」も他の条件を与えると互換性がなくなる。

22 そうだとすれば一刻も早く手を打たなければ彼女の安否

a が 気遣われる。 (3)

*b を 気遣ってしまう。

23 もし彼女が中谷秀行の手によって羽代へ送り込まれたのであれば、
その安否

a が 気遣われた。 (9)

*b を 気遣ってしまった。

例文9も～テシマウに変えられない。

*9' その日の来るのを自然に待ってしまう。

自発のラレと～テシマウの互換性はそれほど高いものではないので19, 17',
20, 21のような例は多くない。以下のような場合、置き換えは不可である。

(1) 例文14, 15, または以下の24のような客観的叙述のために用いられた自発ラレ。

24 新内閣の閣僚人事をめぐる、これから各派の反発が表面化すると

a 見られる。

*b 見られてしまう。

(2) 以下の例文25, 26のように否定形の自発ラレは可能の意味に近づく
ので～テシマウとの互換性はゼロになる。

25 会社の伸長期に入社した大竹らは、会社の発展を支える尖兵となっ

て遮二無二働いた。自分たちが会社を支えているという意識が誇りとなって、辛いことも辛く

a 感じられなかった。 (5)

*b 感じてしまわなかった。

26 梅田は必死に抗弁した。その表情に演技

a は 感じられない。 (5)

*b を 感じてしまわない。

(3) 例文22, 23のような複文の場合、その格関係と視点の設定の関係から自発ラレの動詞→Vテシマウの変換が不可になることがある。

しかし、動詞の自発形が作りにくい動詞——「言う」「話す」「出る」などは以下のように～テシマウによって「自然に起こる」意を表すしか方法がない。

27 あの人があまり聞き上手なのでつい

a 言ってしまった。

*b 言われた。

28 隠そうと思っても昔の癖が今も

a 出てしまう。

*b 出られる。

自発形はすべての動詞から機械的に派生されるものではなく、その部分が欠けている動詞については～テシマウなどの代替表現があることを観察して来た。～テシマウは前後の文脈、複文内の格関係の統一という面から、使用不可能になることがある。(例文22, 23)

自発ラレが落ち着きやすい統語的環境はあるのだろうか。自発ラレは動詞の現在形と過去形、どちらにも問題なく承接する。(例文23, 24) 否定形にも承接する。(例文25, 26) 助動詞との承接も問題ない。(例：感じられるだろう、かもしれない、そうだ、はずだ、わけだ、のだ……) アスペクト辞には制限がある。テ形に後接するアスペクト辞の(～テ)イク、(～テ)シマウ、(～テ)クルには比較的良好に承接する。連用形に接続するアスペクト辞の中では時間を表すもののうち、開始を示す～ハジメル、～

出ス、～カケルにはよく承接する。継続を示す～続ケルもほとんどの自発ラレ動詞につく。一方、～アゲル、～コムなどの上下・内外などの動きを示すアスペクト辞と自発ラレは共起しない。受身や可能のラレは自発ラレほど承接の範囲が狭くない。

3. 受 身

「彼に肩をたたかれる」のような身体部分の受身文、または以下のような所有受身文では、受身のラレは他の用法とまぎれることが少ない。

29 わたしは担任の先生に息子をほめられた。(「ほめられる」は受身、可能、尊敬の用法がある。)

このようなタイプの文は一文の中に動作主(ニ格)、動作の受け手(ヲ格)が明確に示されていることが多いので、受動の意味を把握しやすいのであろう。受身文で、ラレが他の用法とまぎらわしい、または分化していない状態にいるのはその他の直接受身文、間接受身文であることが多い。

ある「Vラレル」が受身なのかどうかを問題にする時、まず最初に判断のより所となるのは動作主がはっきりしているかどうかである。

30 彼はファンに惜しまれつつ、1990年秋に引退した。(受身)

31 彼の引退は本当に惜しまれる。(自発)

30は「ファン」が「惜しむ」の動作主でラレは受身と解釈できる。

32 「垂玉温泉の“ゆしま”の女将さんがいったじゃないの。堀越重司さんは即死ではなかった。もう少し早く助けられていたら、死なずにすんだかもしれないって。」(8)

32の下線部分のラレは受身ととるのが一般的だろう。その場合、主語は「堀越さん」になる。しかし、前後の文脈次第で主語を「わたし(女将)」にとりここともできる。するとラレは可能の意味を持つ。次も同じような例である。

33 警視庁でも被害者が大企業の経営者なので背後関係を重視し、犯人からの連絡電話を待つ一方家人からの事情聴取および関係各方面の秘匿聞き込みを進めた。

だが時間は徒らに経過するのみで犯人からの連絡はこなかった。犯人の意図がわからないことには手の打ちようがない。犯人の意図が身代金にないとなると何が狙いか。

まず考えられるのは、被害者本人に怨みを含んでいる場合である。誘拐後時をおかず殺害して人里離れた山中や海中に死体を捨てられれば、

(10)

このあと、どんな文が続くかによってラレの意味が変わって来る。原文では、

34 犯人の追及は極めて難しくなる。

なので、これは間接受身のラレ（←警察(?)は犯人に死体を山中に捨てられる）ととるべきだろう。しかし、

35 犯人は成功したと言える。

と続けば、ラレは可能になる。以上から、格関係を示唆する文脈がラレの意味を強く決定すると言えそうだ。しかし、36を見ていただきたい。

36 もう発見は難しい。

36を33の「捨てられれば」の後につけると、ラレは受身とも可能ともとれる。1でラレの四つの意味は相互の関連が深いと述べた。36が続く場合にはラレが受身か、可能か分ちがたい。つまり分ける必要もないのであろう。

以下の37、38もラレの意味が受身と可能の両方を表していると考えられるケースである。

37 弘と真子が十日間ほど消息を断っている事実が確かめられた。誰もその行方を知っている者がない。(11)

38 高沢克美の逮捕に向かったのは佐竹と青柳他三名の刑事である。調布署の協力を得て高沢克美の居宅に張込みがかけられ^①、本人の在宅が確かめられた^②。(3)

38の①のラレは受身としかとれないが、②はどうか。38の後半は、

39 a 佐竹（以下略）が張込みをかけた

→ 佐竹によって張込みがかけられた

b 佐竹が本人の在宅を確かめた

→ 佐竹によって本人の在宅が確かめられた

と理解できる。しかし

39b' 佐竹が本人の在宅を確かめられた

と考え、ラレを可能とすることもできる。この場合、「佐竹」は動詞の動作をする能力を持つもの、「本人の在宅」は動詞の表す動作を受けるものを示す。そして更に動詞の表す動作ができるのは誰かということに言及せず、単に動作をすることが可能であったか不可能であったかを述べるのなら

39b'' 本人の在宅が確かめられた

と記述できる。このように受身と可能も明確な分化を要求しないことがあり、例文のように前接する文の述語に受身のラレが使われていても、視点³⁾を主格「佐竹」からはずすこともできる。

次に使役のサセとラレの結合について述べる。使役サセ+受動ラレの結合は以下のようなもので、サセ+ラレの用法の中で一番多い。

40 日本の文章はうっかりしていると「である」の羅列になってしまう。

「であった」がしつように繰り返されてうんざりさせられる。(6)

41 だが彼らのすべてが企業の論理に人格を変られ、家庭を崩壊させられるとは限らない。(5)

使役サセ+可能ラレも共起する。

42 ケンには、十分で要件をすませられる自信はない。だが、ここまで入り込んでしまえばこちらのものだという肚があった。(12)

43 君は彼女に彼のことを忘れさせられるか？ (可能)

43を次の44と比べて見たい。

44 わたしはいつも彼女に彼のことを聞かせられる。(受身)

この二つの文は両方とも「X(人)ハ Y(人)ニ Zヲ Vサセラレル」と記述できる。しかし、43の「忘れる」の動詞の動作主はニ格で示されている「彼女」、44の「聞く」の動作主はガ格(主題化してハになっている)で示されている「私」である。一見同じようにみえる構造の文から、日本

人はどうして文中のラレの用法を一つ選択できるのだろうか。動詞の種類によるのか、それとも他の統語的・語彙的情報によるのか、今はわからない。述語が原形か過去形か、文末か文中かなどの条件も関係があるのかも知れない。

さて、2. で～テシマウと自発のラレの互換性をテストした。～テシマウは主格の設定の違いにより受動のラレとの互換性はないが、間接受身のラレを補強するはたらきがある。「Xガ Yニ (Zヲ) Vラレル」という間接受身文で迷惑の感情があるもの（例：あの子は十歳の時両親に死なれた、隣の子供に一晩中泣かれた）は「X」と「Yガ Vスルコト」の関係に制限がある。次の例を見ていただきたい。

45 a 母がメモを捨てた。

b わたしは母にメモを捨てられた。

c わたしは母にメモを捨てられてしまった。

d 母にメモを捨てられてしまった。

aの能動文を間接受動文にするとbになる。しかし、bは自然な日本語ではない。cは～テシマウで受身のラレを補強したもの。こちらの方がbより自然な表現と言えるだろう。更に「わたしは」とったdは自然さという点で完璧である。45の場合はdで十分だが、46のようにラレテシマウの後に文を続けた方が落ち着く場合がある。

46 a タクシーの運転手が眠った。

??b わたしはタクシーの運転手に眠られた。

c わたしはタクシーの運転手に眠られてしまった。

d タクシーの運転手に眠られてしまい、事故にあった。

このような補強があるとラレの未分化は許されなくなり、受動という意味がはっきりして来るのである。

4. 可 能

自発形を作れない動詞は多い。動詞の持つ意味から自発になりにくいものが多いからである。動詞に自発の意味を加えることに比べると、動詞に

可能の意味の持たせることは、はるかに容易に思える。ところが、形態的に動詞の可能形を作ることはできても、意味的、語用論的に使えないことがある。この節では、まずどのような動詞が可能形を作れないのかをみる。そして2., 3. と同じように可能のラレの代替表現を考えてみる。

一般に可能のラレは有生物が意志的な動作をする時に用いられる。(例47)

47 彼はフランス語が話せる。

48のような「受動的可能表現」(寺村1982による)も〔 〕で表した動作主を想定することによって47と同じように有生物の意志的な動作として位置付けができる。

48 香港では〔人々は〕生水は飲めない。

意志的な動作でなければ可能動詞になれないので、

*49 子供は環境にすぐ慣れられる。(有生の主体+無意志動詞)

*50 ここを掘れば水は流れられる。(無生の主体+無意志動詞)

は不可である。しかし、無生の主体であっても意志動詞を述語にして、

51 この機械は一時間に五百個の製品を作り出せる。

(無生の主体+意志動詞)

のように主体の能力を叙述することはできる。

可能のラレは否定語を伴うと意味が明確になる。～タイガ デキナイ、(～シタカッタガ) デキナカッタ のような状況を表すのによく使われる。下の52'のように肯定形では自発との分化がはっきりしていなかったものも、52のように否定形になるとはっきりと不可能を示す。

52 霧積温泉以外に霧積に人家がないとなると、ジョニー・ヘイワードの目指した霧積は、この場所の他に考えられなくなる。(12)

(ラレは可能)

52' 霧積温泉以外に霧積に人家がないとなると、ジョニー・ヘイワードの目指した霧積は、この場所だと考えられる。(ラレは可能、自発)

最近の傾向として、可能の意味をラレよりコトガデキルで表すことが多くなっている。Vラレルとコトガデキルは100%の互換性があるわけでは

4) ないが、互換性のあるものについてはかなりコトガデキルの侵蝕があるようだ。その原因を考えてみると、まずラレの多義性による曖昧さを避ける意識があるのではないか。次に以下の例にあげたように、動詞の可能形に形態的にゆれがある、もしくはあったことも可能ラレ衰退の一因かと思われる。53, 54は松本清張の小説（1971年）からとった文である。下線部の動詞はいずれも動詞 stem+areru の形をとっている。

53 「ぼくは君と違って眠られないたちだから、今のうちに少し体を休めなきゃいけない」 (13)

54 「とにかく、ここにもゆっくり休まれない」 (13)

この形態は、現在標準的なものからはずれつつあるのではないだろうか。「行ける／行かれる」を除いて、子音動詞に -eru を添加するか、-areru を添加するかについては、地域的な差が大きいと思われる。

次の文は「用いる」にラレが添加され、それぞれ尊敬と可能の意味を表しているものである。

55 もともと天皇の用いられる^①第一人称としては、秦の始皇帝から始まったとされる「朕」という特別な用語がある。戦前の勅語は全て「朕」という語が表れていた。英語においては君主が「I」の代わりに“we”を用いるのを royal we と説明するが、それに比べても「朕」はつよい主格であるといってよい。いまは「朕」を用いられる^②時代ではない。天皇は公式の場所においても「わたくし」と言っておられる。 (14)

用いられる^①は尊敬の用法で、ラレの意味は明確でまぎれるところがない。用いられる^②はどうか。「用いる」は母音動詞だから動詞 stem+rareru→用いられる で、語形としてはこれでよい。「見れる、着れる」にならった「用いれる」は語用上、まったく認められないだろう。しかし可能の「用いられる」には、なぜか違和感がある。「用いることが(の)できる」にした方がよくはないか。母音動詞は受身、可能、自発、尊敬の四つが同形になってしまう。しかし、「用いる」には自発形がないので「用いられる」は受身か、可能か、尊敬かの選択になる。この三つが同形となる動詞にはほかに「捨てられる」「助けられる」などがある。この二つの動詞が受身で

も、可能でもまったく違和感を感じさせないのに比して、可能の「用いられる」には抵抗がある。受け取る側に「ラレは受身」と言う意識があり、Vラレルで耳慣れないものには特にその意識が働くのであろう。このようなラレのあいまいさを取り去るためにコトガデキルが台頭して来たと言える。

可能のラレは状態性を有するので～テイルと共起しない。動詞の可能形は形容詞性格を持っていると言える。(寺村 1982) そのため、以下のように、可能のラレと他の用法のラレでアスペクトが変わることがある。

56 「眠られませんか？」

「どうもさっきのことが気になりましたね」 (15)

このラレを尊敬ととると、寝るのはこれから、と解せる。一方、可能ととれば現在の状態を叙述し、横になったが今まで寝つけないことを表す。

5. 尊 敬

尊敬のラレは、四つの用法の中で一番遅く発生したものである。歴史的には、～ラレル（古典語では「るる・らるる」）は尊敬を表すいくつかの表現のうちで敬意が一番低いものであった。現代語では子音動詞は stem +areru のみで、可能のラレのように +eru は存在しない。

尊敬のラレは基本的に、動作主の動作に尊敬の意を加えるものなので、主語と動作主は一致する。ゆえに以下の例のように使役のサセとは共起しない。

57 先生は浜辺で半日を過ごされた。 (ラレは尊敬)

*58 先生は浜辺で半日を過ごさせられた。 (ラレは受身になる)

57, 58は主語と「過ごす」という行為をした以が一致している。

59 「あなたも昨夜、少し仮眠を取られましたか？」

「はい、午前三時頃から二時間ほど」 (4)

60 「これは形式的な質問ですが、昨夜はいかが過ごされましたか？」

「はは、アリバイですか」 (4)

これらの例文は、相手への直接の問いかけであること、動詞の意味上の性

格から容易に尊敬のラレだとわかる。主語と動作主が一致すると、後は文脈が尊敬のラレかどうかを決定するのだろうか。

61 「(「日下」という刑事とブルートレインの車掌長の会話)「消えてしまった二人の乗客がどこから乗ったのかわかりましたか?」「お二人とも佐世保からお乗りになったお客様です。東京までの切符をお持ちだった筈なんですが、なぜ、途中で降りてしまわれた^①のかわかりません」「広島までは、乗っていたわけですか?」日下がきくと、車掌長は首をひねって、「それがどこで降りたのか、わからないのです。一度検札すると、あとは終着駅までしませんし、カーテンを閉めて寝てしまわれる^②と、中におられる^③のかどうかわかりませんからね」 (15)

61の①から③は同じ主格「お二人」について述べたものである。①のラレは、車掌の発話の中で「お二人」が「お乗りになっ」て、「(切符を)お持ちだっ」た、という前文に続いているので尊敬のラレだととれる。②も、①と③の尊敬のラレ、その他の敬語表現に囲まれているので、同じように尊敬のラレと解釈するのが一般的であろう。だが、62のように②の後に迷惑を示唆する文があれば②は容易に迷惑受身のラレにも転じる。

62 「一度検札すると、あとは終着駅までしませんし、カーテンを閉めて寝てしまわれる^②と我々にはもう確かめようもありません」

以下の63の①は尊敬と解するのが一般的だが、文脈によっては可能のラレになり得る。

63 かつて豹軒虎雄先生の書をほめたとき、大学教授でいられる^①からああいいう字を書いていられ^②しやるので、われわれ書家は変わった字を書かないと世に用いられない、と慨嘆した専門家がいた。そういうものであろう、と思う。 (16)

64の③、④のラレは尊敬か、受身か。作者に聞いてみなければはっきりしない。

64 「係長さん、わたしのその晩の行動を家内から聞かれた^①大塚刑事さんが本庁のほうに連絡されて^②、それで尾竹刑事さんが留守中にみえたわけは察しがつきましたよ。その夜の香原院長の殺害事件とわたしの行動とが

関連あるように思われた^③からじゃないですか。しかも、わたしは一昨日の月曜日から蒸発したようになっているから、よけいに怪しまれた^④そうですね。」 (17)

尊敬のラレは地域的な差はあるが、少なくとも標準的な日本語ではあまり使われない。その第一の理由は、これまで見てきたようにラレの他の用法とまぎれやすいからだだろう。第二には、この節の最初に述べたように、この表現はもともと敬意が一番低く、敬語を使う意図がきちんと反映されない恐れがあるので避けられるのであろう。受身のラレ、可能のラレを含む動詞を更に敬語で表現した時にも、尊敬のラレは使えない。「オ～ニナル」他、語彙的な尊敬の動詞「いらっしゃる、召し上がる」などが必要になる。

6. おわりに

動詞 stem に接続するラレ以外の接辞は用法が限られている。たとえばナイは否定の意味しか持たない。サセはガ格、ニ格またはヲ格のそれぞれの意志性の強弱によって使役、許容、成り行きの三つの用法が決定する。⁵⁾

(この三つの用法は意味上、ラレの四用法よりはるかにお互いに近い。) 一方、ラレの用法決定には様々なものの助けが必要となる。1で用法判断の基準となるものをあげた。このうち、主に動詞の性格、視点について見てきたが、これらのまとめと若干の補足を以下に記す。

① 動作主の意志性の強弱は、ラレが自発か可能かを決定する。

② ほかに情報がなくても、自然に一番ふさわしい意味用法を決定できる動詞がある。たとえば、「得られる」「耐えられる」はどちらも母音動詞で受身形と可能形が同じ形で表されるが、可能の意味で使われることの方が多い。

③ 上に関連して、「どちらが先に得点を得られたか(可能)」は言えるが、「敵に先に得点を得られた(受身)」には少し不自然なところがある。そのような時は「敵に先に得点を得られてしまった」のように補強表現をつけて文を落ち着かせることができる。このような補強表現は、ラレの多

様性から来る複雑さを補うためによく使われる。

④ 動詞＋ラレが落ち着きやすい統語的環境がある。自発ラレは受身、可能のラレよりアスペクト辞の前に置きにくい。

⑤ 問極受身で単文ではいえないものも、複文にすれば問題がなくなることがある。(例文46 b と d) これは文の後半の主語で前半の主語を暗示しているのである。

小稿では否定辞ナイとラレの関係についてほとんどふれていない。これについては稿を改めて論じたいと考えている。

註

- 1) 影山 (1989a) p. 60.
- 2) 「自」のつく動詞＋ラレルがすべて受身になりにくいわけではない。たとえば「自衛される」「自立される」「自称される」などは受身の意味で用いることの方が多いだらう。
- 3) これは、「この実は食べられる」のような性状規定の可能表現とは違う。
- 4) 久野 (1983) p. 149～.
- 5) 村木 (1991) p. 57.

例文の出典一覧

- (1) 森村誠一『異型の街角』1986 角川文庫
- (2) 森村誠一『腐蝕花壇』1989 新潮文庫
- (3) 森村誠一『銀河鉄道殺人事件』1988 講談社文庫
- (4) 森村誠一『高層の死角』1977 角川文庫
- (5) 森村誠一『新・新幹線殺人事件』1990 新潮文庫
- (6) 外山滋比古『日本の文学』1984 講談社文庫
- (7) 夏樹静子『旅人たちの迷路』1984 角川書店
- (8) 夏樹静子『喪失』1978 文春文庫
- (9) 森村誠一『黒の十字架』1984 角川文庫
- (10) 森村誠一『社賊』1988 講談社文庫
- (11) 森村誠一『指名手配』1989 角川文庫
- (12) 森村誠一『人間の証明』1989 講談社文庫
- (13) 松本清張『松本清張全集 5 砂の器』1971 文藝春秋社
- (14) 外山滋比古『英語の発想・日本語の発想』1991 『NHKラジオ英語会話』1991年1月号 日本放送出版協会
- (15) 西村京太郎『特急さくら殺人事件』1984 講談社文庫

(16) 玉上琢弥『源氏物語 評釈』第6巻 1966 角川書店

(17) 松本清張『喪失の儀礼』1978 新潮文庫

参考文献

奥津敬一郎 1983「何故受身か?——〈視点〉からのケース・スタディ」『国語学』
132集 国語学会

Kageyama, Taro 1982 'Word Formation in Japanese' "LINGUA" 57.
North-Holland Publishing Company.

———. 1984 'Three Types of Word Formation' "NEBULAE"
10 大阪外国語大学 Linguistic Circle.

影山太郎 1989a「動詞と態」『言語』第18巻9号 大修館書店

———. 1989b「形態論・語形成論」崎山理編『日本語と日本語教育 11』明治書
院

久野 暉 1978『談話の文法』大修館書店

1983『新日本文法研究』大修館書店

柴谷方良他 1982『言語の構造——理論と分析——意味・統語篇』くろしお出版

Shibutani, Masayoshi 1985 'Passives and Related Constructions: A Proto-
type Analysis' "LANGUAGE" 61 Number 4.

寺村秀夫 1982, 84『日本語のシンタクスと意味Ⅰ, Ⅱ』くろしお出版

村木新次郎 1991『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院

本稿は1991年提出の慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター日本語教授法講
座修了論文の一部に加筆訂正したものです。